田舍芝居忠臣藏初編　坤

へ遠13
1896
24

へ遠3
1896
2止

田舍芝居忠臣藏初編卷之下

江戸　式亭三馬　新編
朝霧房　舊案

抑行本茶飯古丈ぶ寸立とたづぬるふう寸きついでの
下ゑの撰好。風俗長編ゆえ序破急のふしもへち
寸もむちやくちやの代つゝ。胴満声の調ゑとぐき。
すぐ稽古屋の写そくめうく。見づくしや奴の道りく
すごろく。先禅問答くく一尤ふ文塔宮の分代吉沢

妻子の念佛場。白石鄙の七の国から。第代曽我の八百屋
のと。世話も時代も一口清瑞瑞。ぶいくうるとそやうそ。
おまへの為らひ器用そご。精出し次第で一蕪のさま様。
と早う答付を教方の貴るより実とのれてむせう
ふ先へと追よとべ。習へ下るへ内後の学問も二三家。
用並の書今変へ立合る。床間やし翠簾間と。絵も角も
旦那くふらるもらを。掛板ぢでさうとと付うと
結搗ぢくら。誓古屋へ活計歌楽かくらまとと芸居

より。左衣よりありがくらいへ器版さ。と覇の行くよりも
誉らるくぐ嬢しさふ。風呂屋へさてあき雪隠の中でさ。
声盗掏の地ましし。掛札の板頭へすりあをせとが能楽の
指南所あそこの割合ての出稽。あるひへ南一あるひへ
五文。二百はんで評流して項ばへまぐしものる。油が
変るふ者さぐて出借のよ上下と掠るから。五重の見
臺を持やう床本書ふ出あせる大字の五行もいくぐへ
て借り出を潜人仲る三弦弾の撰嬢ひして方ぐ

うすり歩けば。たまく新うち者ゞ指ざゝきて。あきハ揆
町の金貸の息子。家用ゟ人といへの下ゝ第ゞ
るハ耳へも這入ゝ。親の外男も其身の果も忘れて
るゝ。ゝ。どうで異見ハ。ゝるゝ。勝手ゝ
とゝと本紙切て。ゝ立ゞ言。ゞット合点。
そもも無ゝくゝかゝゝごの末道行。とぬゝ新で牧風動尚
立場ゝまゝ湯暖のと鼻唄ゝ。いゞくゝとゝて
行ぞゝの石高もゝゝ。ゝ誓古屋へゝぢゝ迎ゞ

迎ひ出さまてこゝ方かゝゝまひ。無くも無なゝ。と始の情
今の無ゝ。ゝるゝゝ。ゝゝ貸ゝ。借りて三月に月ハ
情の有合。別涙の義ゝゝゝ。ゝ。
と返済も。親類。親ゝ。ゝゝ一往や二往で。ゝ
親父。ゝ。ゝまくゝと。我慢。今まで恩をかけゝ者も
立ゝゝ。ゝゝ我身ゝゝゝまいで。人の義員世信も
ゝゝで見ぬ新。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝ高も内ゝゝ日紙。迎ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ貸ゝ

へてのぶづらひ。笑ひくるをなのともろいね釜ふ隠ぢらそ
のるふ猿芝居と出るけ。おりてきをの猿猿ふ交りて
大丈ふるらうとろひの外。きるるの義でどこがきま。
和俗芝居がりへ扱おいて。ちゆ物浄るりゆもむろね義云
給金ぬそちろろ出てても抱人のるい湯屋浄るり丈も
猿と働さろへ楽屋番ふるとつりへ中らう。とにぐ
ふ和しめらを。たでめて惜りしふのをが未熟。さてへ今
まで接ぶれしっと悔んでも弦のみふ。ぢいふく猿芝居

の楽屋番も。新造婆のかるしさ。ちま三弦の亢中が
小使ふたるきつろうを。コレちろ泥ぶ。日輪ぶらるおや。へを
て来い。とらいをても。芝居の隠借ぶえるしねわ怠る
ヨ。たいく。ずんでござりゆきと。とうろくをるふ。きろい
金十帝ぢや必ぶるへへれてくれねらしらふるぢや。ハく
かるとすりまるとふよう一交やニ交ハつるつれちち素人
と見てハつきまハ。そををれのるむ楽屋のあでづれ。
いろう芝屋るとろ虎つるふい。ずんぞ者ハをち。ず新用場

で久しもあげてあらう。それハ能ハ。我ハ泥を飯るゞ汝の
ものハ。イヤく我ハ泥飯ぶ。ひい飯喰ふとまをたくいて
菜飯をよび付。借ものさうさて。おうくハいなんとろふて
ぢやなる菜ぢやな。テモろくいとちく者ぢや。鼻ばぶ
ないイヤコレ助太繁云。鼻杖の序ハ。肴物と論も。
菜碗ふすりと入をて生ハ。とりふわどのる合点ゆう
と。長濤の十彈寺へ行とまうで。彼のちきぬを雑
用場で向合せ。指ちぶ調帝役。ちにハ出ちくも

我身の結。どうぞセンボを見えないりの。と公をつけて推
量してゐるホ。ちんぐりぐんくとうふを。ぬぢやとこえ
きべ蕎麦食ふる。我のとろけハ止てちハ。とりふハ弾
ハりやぢやとうふる。ちぶらんくくと云て枕さるうハ。
寝るゐと搾り。ぢぢ紙を亀てみて。ちと紙ふ亀しと云
くまを洗ふをゐてハ。煩るゐふ洗ふまと見え。女ふ
の美しハをゐてハ。おうぶ助ちうぢや。醜ハゆにうぢや。
ちに助ぢやと云ハ。小児をえど。婆やとしうの見物

をえて。くるのたきゝ。そちゑ。ゆんよりとたうぢゃ。
とうゝて。ぢそきてくゝ。鄙いるゝ。えゝよく。ゆゝきさん
るも。つい。合点がゆき。ゆき。年もたゝ。きゝ。ゆるぢんゑ。
いろゝぢのゆだきとゝ。ゆゝ。弦國をめぐりて見るゝ。ゆ
ゝき。蔵の夏ともつゝゝいとも。そゝゝね。きさんどぶ。我分の
毒。つひゝ。一人蔵の田舎あるゝて。行本。宗服ちゝ。ぶ
ゝゝせ者。行の国ゝ。行ても二日目ゝ。屋ゝ。帳ゝけて。ヨクり
三寸の身。腔りの。どうしゝ。ゝ。ゆ。ゝけ村ゝ。十日わぢのゝ。追

田。銀地。狂言のチヨボゝ。たのゝき。勿体。仏ゝ。巻。賀の
大ゝぶさ。ゆゝゝね。先の頃。つきゝまぢひゝ。ゝの大坂者。佐ゝ
出ゝ。ゝさゝりけぢけ。ゝゝ。ゝりちもゝゝねぢくぢうも。臭い
りの身もゝぢゝて。合三弦の。老沢。三味ハが。ゝて。ひゝき
つれて。門ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。おゆゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

けども。あんで秋まうんべい。なぜみ菩提寺イ来ることも。
うらぶ内イさ来わんどる。モシエ茶飯ちまどうとの食ハモノ。暦と
我市
お秘さると歴年とぶ佳例ぐろう。変ちくろう門口でなし
まとべい「コラヤアあにイらアんどエ」「コライ。仲蛇の清師
私
食のるさ「びらがうづくろう。チョボ結りの古史食ぐハエ。
「ハア万載食ぐ。げこ早へるぐ。万載のろ元銭ぐるトちぐと
中の豆粉
「茶飯ちまさるハあんくさるろ。サアよらろくろう
「ハアハトかとぐと飯
の返詞。サアくこ味ハよるのぢやチトるハ

でやトこ味ハがまをひきてあげるゆ赤枝者の茶
茶飯ちまの食をひろうとさるる「ハハいやりう茶まハ。
を清てかにけるらとらハちを長ハ切編
詞なれども淨ろりをろるるのハ古へ法子政者の日まこ
「ぶまハひろハでも
ぐんるハ。おまく先へちんセ「おりく拾ぶモノ。後の方お茶
食のまをろつくまるろ。ろくイハ変ひき合ハ物ぐと心
ひとまくぐろく離くまとぞ。おりく拾も茶食のま
を離まろくまハ「ハハ。これハおりく義とハ云ハんハの。こ味ハと
ハくて。ろくぶこ弦ひきぢや。トらひぐろり赤ぐさハぞや「ヨット
辺である「さんぐろこ三絃ひきイ。まをひく物ろる「青人

菩提寺

ぢやらの「エ」と者ぞエトびろう「イヤ」目のこえぬ男ぢや
「ハア」お盲屋ろ。うらア又菩提寺ざろう盲者と吹や
「ハア」ちきるも大馬鹿ぢやえ「亡者」えい情ないナア
「えゆうと」消えいごくどうり「ごくどうちやア」ござん
弱へ。家さ本堂でござりやを。本堂でイイ。えゆうと
消てくと云やア遠夷ぐんべい「ア、」婚姻。これいよ。ぬん
きりぢやいトりの内大ぢのよりの合るきゆうぐんへ変「こりやア」茶飯たま屋。ぜふ
ハア厄介をかけやを。「二味」八屋もけ大義ぢアる。サアく

家さざざーりう丈「ハハ」。ちたろうさん。先刻ふお使や皆さん
お接でトあるろて一度のくくをや田まさん。野人さん。トあのさろ茶ぐら
一ぺんぢりらと見ようーー
「三味」八皆さんお出でや。糞汁さんも麦飯さんも
お出る「ハハ」。こりや皆さん。ろうろうお早ざろまと。トあのさろ
ぢーたをさざりくを。因ま出人糞汁麦飯あのくく山在所ゆてひとくちづもらるる
たまのるきくをとる。てあの田舎まりのでもたまふけいこーくるるゆえ一くふまと
うんだりゆてふーーありひくをうくりう何の方のことをゆてなまりそのおろーーさ
ふるき出さねりのはまーーされども日すぐ中あのくく二三ぐんぐ法ぐけてくるる盗者
むきさりう高世りのはさうふちくくぢのうちは葉ぢりけかるるやの山のぐんまどるるべ
かまぐふちの釜へ山椒たまの葉ぢりけかるるやの山のぐんまどるるべ
「どうでござる」たまり屋。「味」べモノ上のくの義たろう屋イ

殘念ふ思ひなるげごる「ハハ」たる程ぢや。これとやうなもけ連中の店員のおかげ。イヤモ有ぐさう存まさる。トキニ例の忠臣義ぶ紙つるぢやな。そ〳〵〳〵チヨボ申りまゐよろ「扨そこでござるテ。日数ウ掛てもあん移くるぶんぐふよつて今須〳〵ハア稽古ふかるべのとろひまさまで其。七加減さにイ教んべいとろつてサ「ハハ。そりや云ふう也ぢやろいの。忠臣義ぶ紙つる彈合もべらんるもちや。デモ一すぐて見まゐよろ「一すぐふでも移く。皆素人のるぶろう。

ぶ其の息ぶる不と。役者の口よつてさ文ふる不と紙書い競べつして世ふやアるん移く（什円程ふ思しみて ちまをまぐまく見てみる）「コレ稽古。ゐれェてこふあふよを付てみる。あつちサ往移くで。

「コレ私「万載サアんべいとろつてサ「あふけたあてべいつく。其陳ふゐまを菜でも汲めを「アイトふせうぐに程ふ云ふ云ふ移くる万載も孫しいるぶぐ。お育後の方義もあんまりやアあんめく去まる万載ハ天窓へ出ア切て離イ歩掛ぐぶ。私まる方義ハお育で三絃ひくさうぐ。方義も紙味八

と名ア更る程ぐら。変ハた誠さ扱て三さらともいべい。
うらぶ紀方変な者べい丸の迄むが好ぐ。トひとりごとをぶわく
ぐらけの茶ヨん二つ、中つくろる茶を あくらきりふくくてくるこ地の
丸がんへの豆て拵る丸け茶ヨんハ大どんどの丸蓑丸の時教ゆ十を寺へ
おくりしるらハ 注 「サア茶でも食ろう豆」「あんざいけぞんぜな
茶ヨんまり 注 豆蹲て 注 「アイト」をりも甘ぞ 茶 「ハハこまハたぐり」 三味 「ヤモおろ
ちびふて出も
ゆひなるな 注 「ふふハア。かゆ〳〵家もあふもごぞん移。雑煮
ふるなぶ
玄永ゆで弱りぐアらら。茶べい食呑で移べい深さろ豆。
モノ。茶後も一時ぐアよ。トそろりたのあい
さろしてくめ 注 「七そ進どのも

清瑞嬉がるるいちゆるさうぐぶ。表徳ハあんとらふぶナ。「あふ 注
我ホ
うらぶナハがるる云べがるる。あんでも移くるゆぶのサ 注 「あんちの云 注
表徳ハ 注 「糞汁とさ 注 「糞汁ヱ。田ゑ村の蓑十郎と移らア
しの子。モノ。玄十もぶいくがるるでヱ移ろ 注 「あふ。うらぶナハ
宗上前ノ遠ゑ 注 「主ぶ家ハ先祖ろ已て清去宗ぶつけ。主に
ぶお貳ぶけあと大病と見ぶくろて十兒一生の時。紀類
主合菩提寺の和尚さゆも納坊の上で。百日法紀ふる
さるゆぶ有けく 注 「あふ。其るでヱ移。今のハ酒落さ 注 「そん

ぐらう酒盛と早くてとるぶ舞うさ。ソシテあんぐんべの一番
後節さ。モノ巻後ホも二流ホまつてあるぶる。うらアあるム
恒ぐらあ方でぶつて志めべいとろつて。あ方さ出ず。
まづ常般法師あ志ま後の弟子ホ徳利志まちム人と。
今一人ハ富本巻志ま後の門弟で片仮名志まちム
人と二人りホ出ず。ひ志まくちやアロアでも浮世まる
名人ぐげご。あふぶあり人席賀長唄ちム浄瑠璃イ。
大広座でぶん出ぐらぶる。ちとも志ま稲。モノ。ア。りの

ちムホよ。大よせホよせの廓の名とりハ。千山万海あ
ハぎろちこと。押せ出男。かるもりてきとそいく。つの
多拭のあうハうぶり吸付たばこの火皿せ。おぐんで呑
で居るハのあちムホぶ。ごうホもかうホもこそくされまんざ
ヨレ云十。能加減ホ志ろさ。ひ浜長まんでも。野人云べ
ひ村でのがすりくぐぶ。うらぶ長志ま長イがあつても。巻
後志ま。まんぞ物かあア志る物で五稲。五笑ア。ちんあ。巻
後よこの巻後志ぐ後志ぐ浜長まんぞ物で五で長志ま

節べい。がるうて居さうな。うらアうらで。巻後節かな
るわさ。あゝも。をイ。宗貞が悪ろア云ふ。あんのうそで
ざる。宗論わ。お輝既さるうらのお云付できびゝい法会で
ござうア。あゝさ宗論仕る氣でも孫ぐ。をゞ巻後節
べい巻ちざるうう。寝さみるちま後のおも氣のぐく。
二ツゆゝ明日奥行のウ仕る。滑狂言のチョボ後ざうう。
をの氣ふあうう時ゆやア判官をたゞめとして。
ふうちすでの役義ふかうる。明日の役義を首尾よく

勤るうゆゝ案仮ちまゞ後の内ふ有ちゝ物ざ是が又。
隠り狂言サ出て。巻後節でもがるちゝ物でを孫
うさ。まゝるわど乃狂言孫。同ど去ちう彩田
で。去十と私とが一ツ田で作ゝる。で去十が五俵
うて。私が五俵まうう。去十仏持ぐ孫アあん久。
それがモノ。高賣石家ざ。ナントちま後さうぢやアあん
久ゝ。ゝゝ。ゝやうう義経遊ハ一ツぢやゆうて。ムトツト
かるうんぢや。ゝうイの龍がつうまんざ。あんふ城ふざうる

ろこそ。書おさうこそ。ゆきそう丈。イヤ又養生節
もさきそーいよ。什弘江戸ろうまと酒本飯太平の云人
人ぶ借りけ。あきへも。あんぐろけ。雪降ぶ坊さるぶ
来て。一夜の宿所借べのとりへ。そこの内の娘ぶ出てり人
ゆやっか。するわどろア什大吉ぢやア家ろんべいト。ぢうで
見て泊てをでてへが。婦ぶ留ぢ。其よりふ丈人男の
ろうらア女のるぶ。手の巻こへぐろ〜四の五のあん
ゆくろろけども。そこぶそれ時のえぐこ。孫るちうよう

でぐんる孫遠ぶあんゆく物でも孫へ。鼻ぶ欠でも孫病
でもの道べの弓彫ゆるん孫へ。とろく泊孫さ。き
つい女ぐろ。まろこその場るも。きろこぶ孫へりんぐで和へ
出ると和ぶ。雪ぶぐんくホハア降て来る。こりやハアたまん孫へ。
孫へも先へも孫ぶ孫ぶ孫へ云の和孫借り居ると。者へ
遠ろこ物ぐろ「ハテどうきろこぶナ」そこ孫借り知ると
雪ぶ降り出ぶ。止どぶちのくらい上ぶ晩ん君ろく持つこ
「名へ云つのあんちア寄特のある物ぐ子」あれハあんちゆ

狂言ざる「ハ」それハ時頼ぢや「ハ」時頼ぢゃ弱ぢゃ
ものを物ぢやア弱くろエ「そ」それハ地面火あれハ北条時頼
死「ラ」それく。富士見西行寺蔵ごろける「ハ」イヤ嘉
明寺ろナ「ハ」さうぢや「さ」さてく音曲云へ物ハ。能狂
言熊女人成仏まるゆんぐゴテ。さらが村ゆむし書世
高ちろ蔵ちゑ人がゆつて。ろりやアハ雑ぶ名人さま。
うらも武人の遺物蔵ゆ。るゆやをちかくとおろくらゆ
もござろこ。その名ちろ蔵ぶ像ゆ異類ろ形ゑ奇

特がゆろこ。ある時熊坂の強を征ろこげざ「ム」「そ
こで「その熊坂を一番うろろて寝ろろ。其晩盗人へ
ぶ這のろこげざ「ハ」「こ」これハゆうぶこ迷ゑ奇特
ぢやゑ「情の皿非科ぢゃろの「ハ」「モノ古ま蔵も
三味八蔵も大坂の生生ろゑ「ハ」「ち」ち拍でござりまと。蔵ろ
ゆを助るゆどの石仕合。トけろろいの「ゆ」「体」いぢゃ
ぶ〜んゆ仍て。ひ拍ゆ目ゆで潰ーーろいい〜〜。ひ古ま
ろんも大坂でハ二とさぐろぬ大立者ぢやゑ。関東ゆ

見物しさふてくれまし。三味線も大坂でゑらい者でござりまと。いづまの芸居出でもをどりやる。江戸へ何ぼ下らしつる。八百年あうすまとゐ。江戸ハ名論三ぐの津で菜飯をまゐらん者ござりませぬ。初下りの時の景氣ゑ古国ふかけさかつた。引幕三張。水引幕二張。染抜の幟。ありやさんが狐でおつるぞい。

「僅ゑ十六ぢやゐ」「ソコデ新浄瑠璃の名代が女春川忠臣撰。世界ハ山拆きまで。この切がゑらい大場でおつるゐ。舞台を二別て生へ中が嫉脊川の流れ。家の方の亭ゐ安徳天皇とちうなつて生良のゆが女房お石がをてゐる。其嫉ゑ石堂九が掛教の罪で石ゑ俗ふ。ふるふ。ちやの方の崖作りの亭ハ真ゑの花月で。お名ハ山拆きまゑ娘の雛ゑる。図の年月日時掛ふ。ゆゑふ生膳をとゑて真鳥ゐ食ハせれべ。忽十人の形をあらつをとゐ。これハ四の切の弓んぐーの筋ぢや。まゑら切ふ雛ゑるの生血と真ゑるの生血を一つふをると。実の

視ると現へきて弱姫の慈悲歎。庶のうの亭へ矢間手
海疾付の狂進。石堂丸を縛中玉浦へ義経てみると。
道奥へぶ引けて一面の波幕。波板。一のまろ三のまで。
舞茂中ぶ妹脊川とするト。爰の義経で弱姫の怨恩
ぶ出羽とをふりて川へざんぶと飛入て。安珍さまへ
のうと弘とさうつてもく西へ。金瘍み弟今國ぶ出ての
時切ぢやつこぶ。さうこのちづこでござりやーこ「其三のかイ。
雅ぶ浩ろこエ「ハ。その時へ改ちまぶと狂ちまぶの掛合ホ

せうろ「彼ちまぶと狂ちまぶ。ゆもせうろこうさナ「ハ
さうぢや。ソコデ宴ホのる菜飯ちまぶ。ちまぶ。ちまぶ。ちまぶ。
中あひ振ホぶる場を掛合もあれ迄いい。私一人で
浩り呈ーぬとうして。大切を一人りで浩ーこ中ーこ「ハテ
きびしさの能るぶろけま「其時の狂狂ぶ名ーこい物で
ありこナ「さきびいな。玉掛ひとりの義であるこ「まづ
祝仁さんろ「祝仁さんとハ浦町の利兵衛。汁は古へ
ホすこ改ちまでござりやこと「そまホ石町の文兵衛。

けなの位さまぢや。これも遊び古人ホさまんまーこぐ張ホ
ろうの大きまであること「をしるるきてのけうチ。淨瑠璃
語のまとりかうろう位さんぢや「そまろうけ村屋の浄瑠璃。
義行屋の忠義どん。油屋の佐助屋。中村屋源ヨリ助屋
ろうそりめて。奴金さま屋や。あのおの四郎兵衛さま
屋さどん。ロどりしてみこ時代であること「其中で三切語り
わどぢやろう。今でこぶの津ホ浄瑠璃さま屋ホ掛づく者
ござりませぬ。大坂で屋ぶろう屋ぶ浄瑠璃文楽段屋様で。三弦

ひきのまぢやとりかるまど。私ぶ守るみぢやうへ。み大体の
さまハ皆浄瑠璃さま屋の形へ抜き吉ホ浄瑠りまさと彩ぬて
二人りしてま狂う語るも。ふ抜ふるふぢや「ハーイ。
ふ抜ふんべへしても眼ぶあんめへ「ハ。ろうや張つこ。哥抜
と舞でかぐぢや「イヤモウ実ホ。あつちやころちやうろ抱ホ
来てうるさうてすーんへ。ぢやホよつて三味八と使合て。
芝居の火宅をのぶまてこぢやうへ。さんがハアうるせ合て。
ヒイ。本を一冊りと弱へぶ。大きまさ屋の分ねぢやアあんめへ

「ときゞトット浮るりの世代廣さ仏指ちやうの。何借れと
いうんしても。ちかんでかぢや。ハ。猿ふあるうの。ひ猿ふ
「するわどハア。乗来覚え迄でござるゑんどアうう猿ゆも
あるべいぶ。三味八後の三絃を指猫へあぜござる。細ー三絃ぶ
猿ふあるろる「ハ。いやく。猿ふへござりませぬ。トかー赤面より
おふ弘弘むすー、ありてびすくみ六冊のよせかを風呂義ぐるう高へたうう
三味八ぶと味せんもがうー、とるかくざ物すう何貴ーろうてやりく今とつまぼこ
「猿とちういて居きべ。狸の猿離イきく方ぶ舐「イやく。
腹ぶちゆや何業も沙うんるゆちやふようて。猿ぶ舐とう。

悪いとろやかを。和ずぐも猿ふ舐ふりて猿ふ見えぶある
ぢや「猿ふふふ指て猿とちうして居るぐうう。一時ひろ
丈ゝゝ「今度の猿ふ江戸へ廣りろふすくゆる。三絃
も能脚色へ出て。生くく送りまーう。ぢやふようて二人りぶ
什使ぢや「さうなるでもあんべい。モノ大坂で産れぐら
義太夫節イ上手ふがるうう。江戸でまれと
官戸太夫後なんざ。ととるーへんぐま。猿ぶ舐猿ぶ舐
てうてもうらアうふ戸太夫後ぶ一番ぐんべいとうよ。江戸

うすもとでさ居りぶすくて。俳諧師尾張ケイ京大坂の芝居サ
居りて。大おくりイとりて居りくちく物ぐさら別人ぐさる。
くちイあんとそろしーまるエ。ド一だんきりられてこりゃ義ちまのまう
さるもまるうぐさとあく見ぐ目と　さるもまるてみる人さてらうかりのあい
目をえん金さとーまるくけるぐうでござる子「八まるわど。左様
ぢや。京戸さんそろくへ物でござりまとる。トット上でも。だり
つくげふござりまと「あちでも忘らう異屑ぐつくと
げふござりまと。一体業ぶ能くら其若ぢやらな「更一
京戸さんく人物ぶ能くの「ちまま後も之味八後も。今までの

俳イ皆後付で俳さくくぶ。京戸後ふ限りて。京戸さ命と
云くくーまるへ。あんちくるぐんざの。「サそまくへ。
そ。アノ。そまゆへちとる細あって。トあく「ハテもくくの
るア云孫へりんざム。俗こ後付でも振付でも能るサ。
主ぶ博物面ア付るくいア其るぐふよ。あふも竹村の人で
孫へくる。搗へるアござんねへ。左後の出尼介ふもなれ
ぬへサ。あまちんさ「ハテさんでもトらく京湯桶の中へ麹泥とかんて立八
寒日えあまとをちくくうんあまくのまう
本綿の中へのまてりちち出

「サアりく泥ぶ好りまとで皆一つ

西郷ノ侍さうず。扨和尚さうの口よりぜござう。モノ。今多の
候義イ繁冒ふつて。願以此功德のうち踊教言のうち
しやうを立て。皆さうふたつ大義をかけやを。付てハ今和ア教
古サさうしやうちのうぐふよろて。分ぐのきつさ酒サ集あ
て。豆腐の食除りイ振舞やをぜござりやを。モノ豆腐
と酒ぐちくとんべの代ハ番撥ハ山盃ざうう。是ヱ酒ふ食ウ
てサ酒と豆腐の呂うぐ西ふさうず。ちくふ食ぐ其うあ
口よトらんぶ「びうぢうづうぢうぶ。あハイねうさとぐ接吉あを色て
ヒヨイと引込む

「この口しろより納ル酒出来り今の口よりうぶうぶ形接吉あぐさべつこうら
ハア云ひやう稲。皆ぐふんぐえハ呑うず「さうやアハア
糸ね。ぬぐぐ舐らひやうと。和尚さアハ御て是さうず
ず。トキニ。西念度一ウ飾うしやん稲くう「解ぐう食
べハが。酒ハハア一寸ものハ稲ハア「さうぐうう止さうず。
縁ものき元生ハ度しぐ「サアく吉ぬ後も「味後
も。ちくべハぶうこねうぐと飾うず。「モシ金をとる男と其ハ
どのハ。さぐうさぐうハ酒ハ実お振舞ア後ア出ねア

三人寄で日を
引つけ引人うがくやい
ぬーやどのでさるだ
でござらーよ

「今めーこと有り。主等も聽うんべい」「さんざうハア
孩へおちつくとうのりんどさ」「サアく、さまで度つぐべいうナ
菓」「ハー。これハさでうト菓子屋」「モノこの味八度へ見ぶ指」
てみるべい。うレ天用の宴サでござるぞ。孩ろう。ひとりとて
居さうせ。うりやよかんべい三味「ハ。ト一ロ酒ぶまこの菓ぢやナ
朋友菓「大悪酒ぢや者ぶ精進物の癖ハ米の繰掘ぶ涙ハ
清る。ラット孩を清らう三味「うんぢやい菓「繰掘さる裏
麿ぢや三味「ちくハくト「ちーわつきさうして食ふを食ハ
ぜんナ「孩ハ蕎さア

七そ迷さア。飯うせ孩七「マアうを飯うせ「サアく食吉
どの。厩助度。そこくの美ん気達。皆ぶ宴サまのうせ
ト付内ぶくく盃るあり○扱盃も大掘ぶうんべうるる「ハア宴も
十ろぶん下ぶり丹くき「盛手の邪魔ハちやアるる
かんべい。さんぶくハア。私イ彩り毒手と「ハア恵法絶
ふるり丹くき「サアく三陰用ヨりのきる役者ちイ。
宴出さうせ。見ろう秘書古ぶく七「まづ葉役義の
幔面ぶ出ぶて行端ろう飯ぶ。玄千を者ろ支

「アニうらが出へい」「人別ナ出くるも同様ぢア。清雄様様よる物ぢやア。物の出イ教むゆも及で無」「きんぢう金吉屋。主イ。まだ不するが能」「コアイ外ふるうぐい」「能ぢエ。厨所屋。あんで外えがへるべエ」「忠臣義ちゑ義」「ふるるぐ」「あんでサ」「酒義さ」「酒義ぐらべ早くこらす」「扇。能うち出くぐ」「ナづ屋屋ぐまぢア塩治判屋が八幡七ち進屋。ウし能ぢる。能ぢうらす。能を

いのべいい。エ是サ。後の字イ出ぢとも御るぐ。名を出けば能るナさト仕内役、日りを一くふ出るとも〇四まぐ家ようこと味線を持ちれば三味八これを使って御ふを今日家屋敷まへ向湯をのこなぐ　ちえ　かうまんなうちうて食べ〜ゆる

「扇ちを屋屋ふ出るこのこへ別義でも強。おかるぐ三人出ますとう。風ぐりてくる柳ぐ三人の扇代。三文がうって下さり申」エ。おくるぐ三人ちゃア俗のるちあい」「そをふやアちくと沢のある能で。能ちもふ三人出ますと。能らうあうふがるつてくれうす」「八。そうやまアどうあとく能まんよ。三味八能ウエ。ヨット

合点いぢや 俳音とい〳〵男俳句を炎のあるあるを「扱き手」後ふやア始てゐる男ふ
かりかと。私イ谷坂の俳音ろよ者でござりかとゞ。モノ
ニ限月ぢやア。醫坂俳肉の役ウつゝゐかと。一体私ゞ
親父イ谷坂の俳肉ちつゝといひかて。其てのゞゝ俳音と
ゐひかと。ゐるゐかと俳肉の役義イ撰ゐる中で。
醫坂俳肉ふ出ゐちゐるもゐ紙なは縁さる。俳
ちつゞるの俳音ゞ俳肉を結るちゐるも。ゐんのゐ国
縁づゝぐんべい。そこでゐゐイ考るふ。彩以かと功徳の

踊イ。菩提寺で仕て俳肉を結るゐゐ。私ゐイの逃
音ふもゐゐゐゐゐ。ゐつもゞゐゐバよゐ下で生るふゞゞも。
私イ今爰へ油ゐゝ羽織イ着て。紀色本縞のゐゐ
頭巾サゐゞて。菩提寺の先徒さゐゐ頂ゐ新珠
指て。杖サ突て生ゐそべい。別のゐでもねゝゞ。其ふ出音
親父イ記念の物さ。そゐゐとゐやア尚年七十八ふ
なる婆さゐも。いゐゐの枕ゞゐ志五ゐ一稼ゝ「コレサ
俳」そもふゐゞござりかと。ゑゞチヨボを「コレサ」「俳る

時。鶴の子孫なる鶴坂「コレサ」体内とらへあぐる。
そこに其モノと歩いて和の「コレサく」和の中孫する
谷坂伴吾とがそろうて下ヒ人「これい来ろう。あれをらへぐる
伴吾。ヨイ大分自分ろうなるを云い出ぐらう。それ
ぢやア忠臣義の表向イとる孫く「そこぐ其和父の
菩提のゐぐろう。不肖してくぐヒ人「なり中孫く。
和父の菩提ゐも世ろう。そもそでい狂言ぐ踊らまヒ人。
ハテサ菩提のゐぐろう菩提寺へ二百年納して回向サ

来て世ろうこが能。さう結きび和父イ和でも。先祖
代くでも。遍吾さ出来るるぐ「コレ来ろう。ヨ名こそ。
二百の回廻後生年納ーべぐ。うらア菩提寺和父
草創櫃那ぐろう。二百やこ百のるヒ人孫く。そりやア
ヨ名ぐ法るイ来ろうこ和ぐ遠ろア。解ちさ甲らふ和せ
て宮和振る云ーこそるぐ。西北幅ーこ人るぐ。
谷坂の伴吾でぐる。踊の指号へ結ぐ。法るの指
号ヨ名ぐ云ーまる男で孫く。ちんぐらよくうらぐ

ぞ〳〵ぞり〳〵。さて〳〵まこと稲くぞな「すりやね」仕「なら」
ざんに止さ。おまぐ止る代わめや。翌ぐ日仕肉縄ウ仕る
奴ぐ有〳〵。ぞに通さ稲く。おまえ猿づ〳〵でさを稲く。
警坂仕肉を谷坂仕者ぐ勤稲くぢや。先稲く鞠〳〵て
さを稲く。サア来たんつ。主男ぐ〳〵仕肉を縄ぞふさをて
ぞんぐ能。おまぐ〳〵仕る。一すの宮ゆも五ぶの魂ぞ
う〳〵。一尺の宮ゆ五すの魂。おまを三尺五すの男ぐ
う〳〵。ヲ待よ。ぞ〳〵ふよつてト。ヲ一尺七すの五ぶの魂ぐ。
あふ〳〵ぞ稲ふ物を食さをべい。トうでをヨ「」尺さう尺谷
坂の仕者ぐ宵ぐあらアよ。弱味稲べいぶちよる甘塩
ぢ郎とんちくと遠てべい「コ」仕者。主イすぐ弱
稲ぐ美へよ。先おるを正て尺〳〵ぶ能。家ゆも主
後ぐ能てねさつ〳〵ぞる。忠臣義の狂言で「ハア」止
さう尺。ぞう〳〵ぞんを能〳〵耳イね。能ぐ主ぐ主
通つさをて尺〳〵さ。〳〵ぞ〳〵ぞ踊イ出ず〳〵ね。「コ」
仕者。さう〳〵て海むあんで主稲。おまぐ氣ぞふ備

和〻して穏せべいろう「あゝ清和寄こぶ能」「さんざらけ」
たゞくろぶ見猛ゝ和結るゝ。ゝ子爲るさんねゝ「さんねよ
「ゝらざゝ揚まゝて踊るゝ。ゝ一人ゝ過ぎて。ゝ
猛ゝ義ゝゝと猛も力義猛ゝ。あきゝ世猛ゝ沢の面づく
ぶゝ。さきてゝんせざゝらゝ「徒内をや」「ゝサ」「さる
ざゝ見ん惜ゝゝらよ「見惜。あんのかゝど。角な碁
も。丸な将棋も。たゞくろぶ脳こすゝあるゝぶ猛ゝゝ
「コレサゝゝゝ」「ゝんさゝの「ゝんさゝゝ和ゝ論ぶ初ちゃゝ。

猛ゝ石ぶどんちゃんさる「ゝきでもゝの野郎ぶ「ゝ野郎
ゝゝゝんぶ。ふゝぶゝ。ゝゝゝ和ゝ。ゝゝ猛和ゝ「あんぶけ
溺器野郎。ゝゝ。たゝゝ手ぶ考ても昔ゝゝゝ抓柄ぶぞ。
たゝゝびゝゝゝのゝ足やゝ十足「猛ゝゝゝゝゝ見ん猛ゝ
「見ゝゝゝ見猛ゝゝ振舞てゝきべいト
「ゝゝゝゝゝ

付が悪いとらうんさも乃犯ぢや。サ実ふあるらい。十一
時同病付の切ゆ。焼香場を一切外らい。サ熊ろナ。焼
香切ゆ信解がある。其信解をおまへの犯化粧の
信解ゆ〳〵て。おまへが同向さん〳〵〳〵どうぢゆへ。夜
焼付もおまへの弧ゆ〳〵て焼香とるぢや。ナ熊ろ。其代
三時同ゆ志ろうさんのいわんと通り。通例で生ゆん
也。そ〳〵〳〵双方の云情が立て。どうちやも九ろ絶る
なるわど。こりやらうさ熊捌ぢや。サアく〳〵双方

ぶまでもうとゆとゆ手なさまさい「するわどうる」
ぶりくるぶざうく私イ子云ぶうく移く子「うらも情と志ろ
でも移くが。実ゆ一いきこえ移くるゆがあるさ。ゆまいこ物
初ゆ。ゆまへ塩治米官さるの信解ぶうく焼香もと
べうさ。信内が歌の信解へあんで焼香とるぶ上「する
わど。独ゆぶざるムシ「サそこぢやテ「どこぶる「一体
マア信門ハ十一時同ゆポこと斬らきるぶや「ヨ〳〵トびうう
「サおまへそこで斬られうう犯の名用。信の字が探れる

ぢやあるまいか。「いろうめ」「わで」「斬らぬへ」「フント
あんたい」「車らごふ」助ける。ナ「熊ん」「熊ナ」「さとれべ
お半」「降参ぢや」「降参」「降参」「降参」「降参」「降参」「降参」
助る代りふ。判官の家来ふなるぢや。ソコデ。家来ふ
きろと目見えの品で。判官の絵解ふ鏡番。其絵解
ぶ秋田さんの絵解で。お半の形ぶ紀念のおとりふぶ
ふ。慈ぶ利て。見物を泣ろと。ヤモろろの役役。お半
一人りでうまいるまるのぢや「ろるわど」熊ん公の体者

そまふきろめろさ「今」。ろりやあるわど熊理屋ぶ。モ
たたんつどの。今のるへ乱ふ陸ろうんべい。ゆろうと。
只今きろまるるりぶろイこまで納ろの「新
ぶふ公ぶろ。そまで海。むさ「さんぶろまふきろ
べい」「サアくそんまろ」「ろりふ」「ひとろまろよ」「シャンく
三味」「おろやろやのろまんとせ。」「行ってこ家シャン」「大きゐ
でろまひくろシャン」「村内経堂でシャン」「豊年満作
でめでろくシャン。サアく稲吉さ農起

磯ゝ當日となりてまづ朱明より押合へし合ひ。紙屋
金左衛の老若男女。雑を乞べき遊客もなく。ひく
の仔を乞つして。夜嵐の好こと形容の粧ひ。家紋
曙とぞ定めきる。先本舞臺の板敷中浩
芝居の四面へ葭簀蔦などゆて押囲ひ。見通へ
掛橋のごとく。掛茶へ縄かけなり。天井なしの
祭礼狂言。木戸もなく出べ間場もあるまじ。戸さゝね
御代の服ひとへ。ぶゝ見笠なるもやらへさうん。数多の

見物婦女子どもを引連て。手箱ゆへ豆粉の牡丹餅。
芋胡蘿蔔蒟蒻の煮染ゆて。弁当をつくべ中
奏ともりへべき男。大肌ぬぎゆて第一かゝげ。
大丸髷を所ゆふ引提へあゝイどうぐさ。手例候
食へ給へ。作へおう志ゆぶゝ給へ。こちゝの婆抱
茶ア呑へらゆへ。と大声よゆて奏歩く。表の方
ゆへゝ家ゆかけて居酒商へ店あれべ。酒客車
ゆふ居ゝゝびて。葱ゆ赤蒲塞。鮒のあんけ。

塩ざんまのさう多。など奢ふゝて酒のむもあり。其
振ゝこいつんうさう。時ふ楽屋の支度とゝのひ。
世俗級とあぎゝき男。頭き搖の搖ゝゝゝ紙ゝ。
カチ。カチ。と四ツの拍子まゝ歩ゝごく去ゝゝ世のまを
へるきべ見物衆ふ唱り紙結ゝて。今や遅ゝとまちゝ
かけゝり。世俗級の作者 サア出ゝ屋。支度ゞ出来ゝゝ
舞下手へ出ゝごぶ舞。楽屋屋も見ゝ人ゝ上ゝる。サア楽
級ちまゝどの。早く棚へあゞゝつ世人。三味線ひきイ眼

つぶまゝゞア。ヤイ コレ八義。其猿上りて。ゝとゝよて世
りしてことゞ溝ゞア。あゞ稼く。サアよゝゝナ。よゝべ口上
ゝゝべ 東西ゝく。拍子。幕の内ゝゝゝ口上のウヤ
まゝ。まづ今村出ふ仕。けゝべ風ふとゝて。
其よふ菩提寺徳義さ。出信公のお義をもちは
て大へ大あゝりのゝゝ中しゝる不。今月八ハ徳義
の敵以世切徳でござるふよゝて。云復法する者べの者
金ゝり。級名を本忠臣義踊狂言のウ徳しまゝ。先

此所に求三郎。復讐の名目人さ儀上まと。東西く
「サアく名目人さ儀上ろぐ。皆ど耳の穴サかっぷっと
聴ろと。東西く〳〵リトまねけふひろろてよびまり」作「ちこだへむ。にイ
だまってゐさろと。師匠ど口上いへどと聴さ「ちんふ。
さうぐろけの。ト左右ろ師匠のうちもあくるおうきてある「扇ひ不。塩冶判官ふ
作
元屋の七之進。高の師匠ふ阿古田のちたろ。早野
勇平ふ徳松。曙坂伴内ふ谷坂伴吾こーあとちろふ
玄たんつ新田の弓千。まる鍛冶村の鍛冶。此廊下の廊助

物合之人まて扇ひまとがろりまと。扇ひまとがろりまと。
ゆへ。行本家仮ちまの。三弦亀沢之味八。まづへひふ元仮
用ちぐまりロ上。さうぐろちまりまりうり。ト幕明西面
ゆて法蔵がりうるの師匠かーー衣装の素袍ゆてすもきふ座ーヲく
さむのとりゆうある。紬つきゆて座のにくゆろろをまるる教ゆて
グットにくをつあひさ
でんふ「ふてあり　チョボ「招聴るて古楽屋ふ。歌の元
らぐ左歌の書。天下暴平繁昌とこぶき狂ふ玄式
宮仕接頭ゆろゆろぐ。猛もあろまぐとへまるん。
塩冶判官ゆる宮。仕義へゆる長廊下。師匠よびろけ。

チン　チン　ト　チョボ　なかうると　紀之　さ　ち　の　進ぶ　そで　紙ぶ　こ　へて

「判友とんく。まイまあ。

あんのるすぐ。今日イ正ちゃはとやまらいさでござん

孫くら。まホハア今ぎぶんのろくと。朝飯あの野

仕業。畑でもうるへーつろ。ちんホハア。あきれるぐ。

ぐろくしい「なれわど。おそるろしイ。弟子網法さりな

ぐら。市ぐおサ。ぐるまでエ。まぐぐるぶあんべい　チョボ「とかと

より多箱とり出り「モノ。先刻のるんぐぐぶ。うらぶ　我

和の仏方ぶ。まホ屋てくらまとろつけく。こりやノ見。

私ぶ要拵うろよさーこと紙ぶげる　チョボ「とえ出其

更ろて「するわど。まぶ和の内義後へんぐけぐぐらア。

うらぶ寄サ孫むの代。何和でろかぐ出て。モノニーてん

さうウ和むべいと云つまつけく。寄りて立るるぐんべい

チョボ「と押ひくき「あんぐア。たのさぐふ。よりぐがよ。この

小疫ごろも。秋つまるうで。けんまかさひそ。ろて。見エ

こと。新古今の中の高ぐア　チョボ「け方ふてんさく

とん。ろて。と思案の内。秋気のかるわぬちー。抜へま

あもああけーぞ。ろく〻目とさあらぬ体〻〻。芋友どん。
ゑイ。ひ〻ゑサ。ゑとぞあんべいの。七〻只今只んまさ〻〻。
うるうぶ濃むおを。ハテ。イヤあるわどゑにゑが内ゑ度ア。
貞女ぢアゑ。ちゑろうハアよてとゑがこれぢア。我
妻ゑうで。げんまるかさひそ。げゑ孫もげゑどぢ。わん
わさ。孫行の打ちや駄制のけさうで孫く。その
ゑ豆ふ目奥豆より。自慢さうゑ。あゑ自慢〻
孫くぢやア。自慢さる物ぢ孫く。ニ。あわもむつとさる
るアごぢん孫く。ちくで孫るぢア。今日イ孫ゆもか
孫迎。うらも同ぢるぢア。其中く奥ちゑい。あんの
ちの洲ぢ。ゑエうぶ奥拾うゑ来さだアとゑ。わんふ
く脚ぢ芋ぢうぶ。こ升ゆ合べい濃れうア。熱体
仁やア内ふで絡りへぢう付屋るうゑ。げ孫の方へか
留るで。屋も放うけゆ〻チョボ「とあてこさる雑言ゑ言。
あちうの空爆の門遠ひうゑ。判友さうゑふ合兵ゆ〻。
むうとせーぶあ〻ちづう八ふ〻ゑエ〻師ゑどん

ゆや。酒きげんごま。弘の一盃ガ飲くんべい。たべ。あんご。
酒ハ酔ごと。うつ振ごと。うつ飯んぐんべい。ほこそ内
でごぶろくでも食居ごんべい。うらぶ。俺今飯んぐも
飯ハ強くでも。勤べいあア。きつと勤らア。ほイ。今ま
あゆよを結てみごと。濁酒でも食ごうつ。内ハへぐり
付居ごう。コレ。ほガ指ハ内ハへぐり付居る者。
朝の中の井戸ごアちゝ。後見のるごア。
酔てあごぶ能〻コレサ。とぜんむうつ向ガ遠つこ。井

戸の中の新ごんべいガ。たべ。だ。ち居ごさ。日ハ入ハ毎ご
ごうつ改めごうと。ぶ。今日ハかるつを稼くるごうう
七〻。それごうて。朝ハ井戸ガ居ごうアア。あんのるえ
べい。藪ハ中ごんも猫ガ方ごう。物ガ〻ハテ能とうるよ。
其ハ新の中の井戸ガ。弱瓶ハ付てあごぶ。〻あハ井戸
ガ。弱瓶ハ付てあごべい。うんごるごアア〻〻〻コレ七
ゑ進ごの。美あごうごう付るよ。ガく一あごるくとハ
云ハまあく。扱ア。其奴を川へほうぢるのてあると。ほうと。ほんん

で及を考へ。丁どこを見が。番板味噌をのめと申さふ。
ぞうりくとうろぬぐ。もも戸。其の井戸と同じる
ぶア。井戸エ。井戸エ。イヤ井戸侍エ。チヨボ「と出ありうぶ。
判官後ふを見ると「井戸へくと。西化でも冷と抜
まるべいこふが。丈エまあ。かんきごうエ。物付ぶう言
妙院。乳ぶふきこうう毒養薬を抜むぶ紙「あんご。乳
遠ぶと。見エ。村内一ぢんのちんぶア「もんぶう
今の悪言ハ本乳ぶふ「ちまてこるぶア。本性

ぶうぶ。丈あんと行る「ヨ〳〵ちりて申るべい チヨボ「と抜ふ出ふ
向へ切付る。眉間の大疵。これハとちづむ身のかへ。鳥帽
子の脇二ツふ別エ。又斬付るをぬけうぐうう逃出る。鈴
も俄ふ騒出。家中の侍武士大名ふ名。ちさへて騒
りざとるゆう。師匠ハ抱ゆう。上ふ行ハと 三重 ザア
内ふ居ふ悪どん寝ぶア。早く喧嘩くと云てかんぶさうエ。
「うちア。あんまり面白へうう。面アけん出て見てべいおこう。
支度もちあへ。ひ次の西でも出べいハ「癲呆べいふのんぶ詳

蓑の多が袴らア早く〳〵大勢がかん出せくいと喧嘩くと
いつもごぞ。トあせるを見て楽場を
和扨をもつてかけ込

勸化〳〵

是より二編い四段目五段目の狂言あゝびふ
見物男女のあり さるいろくの扨色をはくり
まつけて

式亭三馬戲作

本書は文政十二丑年焼香場を退き
出板なき入出質の出狂判よろ〳〵事常の

田舍芝居忠臣藏 初編 巻之下 終

田舍芝居忠臣藏自跋

翠袖三子樓上下　黄金百萬水東西

五雲市販何嘗絶　四遠方言總不齊

這繁栄の大江戸ふ住ふ育がらさい。何某は戯曲ふ詠ふ
ぶ〳〵。酒家〳〵三里豆腐屋〳〵二里。ふ自由なりし
ば。居なゝ〳〵自在の市井ふ金馬門の隠家ふ〳〵。三馬

門人僮の戯作者にして文人貴客と両称せらるる藥店
ふ武亭正舗の招牌打て隱者ありり。
芳野龍田は花楓も隣の庭の目を慎しめ。須臾や越
路玄月雪も吾物手よろ眺しば。足ふを知る軀乃
樂しさ。おらぐ奴雲の機道も端外まづよ氣づし
なりしど欲ふい黄白の無いぞうを暇ふ恥やまをまべれ。

さふしど世間乃怜悧的があ〳〵貨を持腐〳〵金ば番人
すふを想ぐ本銭のい〳〵奴戯作〳〵腹を便乃筆一本い。
天我ア福を降せふ欲。其縁故いろふれば一片の南鐐
三歩の金。ゑ〳〵びさふしを擲ぐ三千ば美女鼻頭ふ
現れ。一種ば藥餚二椀乃酒。ひ〳〵べ〳〵を傾れば
四時乃遊觀月ア〳〵ふ。ち〳〵たく。醉て〳〵睡て〳〵醒て〳〵飲む。

其危の滴ゞ腹に滞りて病源候論お醫者さん
でも神さんでも癒ふ〳〵病い治らやせぬぐんぐちゃん
と也と投げ草根木皮ゆ及ぶぬ所諸余人と逃
ふ跡を延壽丹のお力ゆて たゞ〳〵五尺乃體を
繋げど三寸の舌流行ふ後ゆ筆を採りぐゆ
カ〳〵と盃を取りて酒飲ゆぬ病後乃禁酒を
幸ひふ世をさけのゝ隠者となりて金龍山下ゆ
別業ゆ補養ゆ用筆を採れ
文化八年辛未乃十二月十三日煤掃所在賣聲
きゆ〳〵跡より追〳〵業客〳〵債主乃催促ふ風雅
でもゆ〳〵営生の欲慾 三馬誌

四人

弘万齋管巻大醉書

式亭製藥御披露

他家に類なき懐中藥

金勢丸（きんせいがん）　一包代百文
酒の酔とさめ酒とくのまし
わろくのごくけしてもう一通の
妙薬且淫ぢかきぐらくめう修平し
て急病と腹の持薬用て用ゆ

家傳奇方　ちくの黒藥（くろくすり）　一包代五十文
いつわらぬ黒くきちぐちうもも
あり〜ぐとしいつるひ〜ばくとく
ぐとくとくきき即効ふとくはる又ものも
用ればちくの根とくり

小兒百日ぜきに奇藥代百文○本町二丁目市例　三馬店

文化十年癸酉初春發市

江戸書賈　雙鶴堂　鶴屋金助上梓